

そらうがく

(No. 67)
R3.3.11 発行
現職研修委員会
総合的な学習部編集



総合的な学習にも生きる研究

総合的な学習部長 北村 文啓

予測不能な未来社会を生き抜くために、『学びに向かう力』を發揮する生徒を育成することが重要です。総合的な学習の目標は、「探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」です。探究的な学びを生み出すには、額田中学校の研究の柱である小集団の学習とセルフチェックが効果的だと思います。本校の研究について次に述べます。

本校は、令和二年十一月十一日、岡崎市教育委員会委嘱の研究発表会を開催しました。「学びに向かう力」を發揮する生徒の育成を目指し、小集団の学習(CRS)を核とした授業への転換に取り組みしました。本校では、『学びに向かう力』を、文部科学省が主体的に取り組む態度として示す次の二つの側面から考えました。課題を発見し解決するために粘り強く取り組む「継続的に学ぶ側面」と、学び方を振り返り調整し、次の学びにつなげる「学びを調整する側面」の二つです。

「学びに向かう力」を發揮する生徒を育成するために、生徒一人一人が課題に挑み(Challenge)、互いに尊敬し(Respect)、最後は笑顔(Smile)になれるCRSの三つを合言葉とした小集団の学習(CRS)を位置付けました。小集団の学習で一番大切にしたことは、「分からない」と素直に言える人間関係を築くことです。また、小集団であれば気軽に、「それはどういうことなの」「なぜそうなの」「次はどうなるの」等と、学んだことから新たな課題が生まれやすくなります。ここで、生徒の状態をつかみ(Catch)、適切に対応し(Response)、期待する生徒の姿を目指しつなぐ(String)という教師の出(CRS)が重要になります。また、目標への到達度と学び方の二つの視点で振り返るセルフチェックを位置づけ、メタ認知力を育成し、次の学びにつなげられるようにすることが大切です。

総合的な学習の時間こそ小集団の学習(CRS)とセルフチェックを活用することで、生徒は、「学びに向かう力」を發揮でき、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えることができると思います。

新しい形の学び

生活・総合指導員 六ツ美北中学校 廣瀬 浩司
二期の初めに、市内の全小中学校で子供一人に一台iPadが配付された。九月から指導員訪問をする中で、iPadを有効活用した実践に出会うことができた。

現在多くの中学校では、スクリーンタクトを活用して授業が展開されている。A中学校の一年生は、防災をテーマに子供が学区調査を通して感じたことをスクリーンタクト内の課題シートに書き、情報の共有化を図った。B中学校のC教諭は、若者の「離職率」に焦点を当て、スクリーンタクトを使って様々な資料を提示した。紙媒体でも、拡大図でもない。子供は自分の目の前の資料を基に、課題に対する思いを書き込む姿があった。生徒全員の考えを即座に知ることができ、個別に声をかける教師の姿も見られた。また今年度は「ひと」との関わりが制限された。そのような中でもD小学校の五年生は、地域を活性化させるイベントを企画した。イベントの実現に向けて、地域の会社とZoom会議を実施した。「学区を元気にしたい」という地域住民の思いを感じることができた。E中学校の二年生は、熊本地震で被災した中学校の校長先生とZoomを使って会話をした。実際の避難所生活の過酷さを知ること、子供は切実感をもった。ICTを有効活用し、「ひと」と関わりながら課題を追究する。今後、更に新しい形の学びが実践されることを期待したい。

本年度の各学校の実践から

生活・総合指導員 六ツ美北中学校 廣瀬 浩司

本年度は、主任会が映像配信や紙面開催で行われ、各総合主任が顔を合わせる事ができませんでした。そのような中でも、ホームページの「今月の授業」で市内十六校の実践公開ができました。本誌の「学び舎の耳寄り情報」へ十五校の情報提供もいただきました。どの学校でも、子供の実態や地域の特色を生かした実践が行われており、うれしく思いました。

さて、今年度はFormsを使って、市内全総合主任の先生に一年間の活動報告（アンケート）をしていただきました。この結果から、例年通りの活動がでない中でも、ゲストティーチャーを招へいしたり、他教科と横断的に単元構成したりして実践を進めることができていくことが分かりました。本年度の実践をまとめてみると次のようになります。

・iPadやZoomを使って、個人調べを共有化したり、「オンライン出前授業」をしたりした。

・小学校では、理科や社会科とつなげて「環境」をテーマとした実践が多くあった。

・小学校では、学区の特色を生かした地域教材や学区の伝統的な取組に着目した実践が多くあった。
・小中学校ともに、SDGsの視点を絡めた実践に挑戦する学校があった。

・中学校二年生の職場体験活動の代わりに、講演会を実施し、働く意義について考えた学校が多かった。
コロナ禍での活動は、来年度も続くと思います。

この状況をチャンスと捉え、来年度も学校をあげて総合的な学習の時間の実践を進めてほしいと思っています。

※一年間の活動報告（アンケート結果）を別紙で掲載しましたので、来年度以降の活動の参考にしてください。

学び舎の 総合耳寄り情報

一年生は、防災について学習しました。学区の85%が森林なので、土砂災害が起こる原因や、必要な備えなどを学びました。

土砂災害を防ぐことはできないので、被害を少しでも抑える「減災」や、万が一に備える「備災」の大切さ学びました。



（額田中学校 鈴木広樹先生）

一年生は、自然環境について学習しています。近隣にある自然体験の森では、外来種のオオフサモが繁殖し、生態系のバランスが崩れているという話を聞きました。そこで、オオフサモ駆除を行い、生態系のバランスを保つことの難しさを実感しました。



（新香山中学校 大池健太先生）

四年生は、福祉実践教室で、日々の生活で不自由な思いをしている人たちの思いを知る活動をしました。

普段の生活ができないことへの不安に気付き、「困っている人がいたら声をかけたい」と、自分に何ができるか、考えることができました。



（六ツ美南部小学校 馬場美津紀先生）

三年生は、休校で学習ができなかった理科の一学期の単元とESD教育を結びつけて授業を行いました。

お気に入りの虫を見つけ、図鑑やインターネットで調べたことをまとめました。



（細川小学校 鈴木睦子先生）

六年生は、「コロナ撲滅プロジェクト」を一年かけて進めてきました。地域の店や保健所などの感染予防対策を調査し、自分たちの学校を感染から守るためにできることを模索しました。自分たちで考えて作った「男川小コロナ警戒レベル」を広め、毎日放送をして予防を呼びかけています。



（男川小学校 中根千佳先生）